

（旅の女とその下男が江戸口御門より、入ってくる）

番士 「おい、その二人、この関所の中では笠を取れ！」

佐久三 「へ、へえ、笠でござえやすかい？こればかりは……先を急いでおりやすので、すいやせん！（と役人の制止を押し切り進もうとする）」

番士 「待たれい。その方たち、高札の一つ目を読んでみい！」

佐久三 「へえ」一つ、関所を出入る輩 笠頭巾をとらせ通すべき事』ああ、そうでございやしたか！（と笠をとり）ですが、『お天道様が出ておる間は、死害線』と申すまやかしの光線が出ており、それを浴びると疫病に罹るゆえ、相撲はとつても、笠は取るな』とのあつしの母方のばあ様の教えがありやして……。

番士 「何をわけのわからんことを申しておるのじゃ。その方たち、怪しいのう。調べを行なう！こちらへ参れ！」  
佐久三 「笠も取りやしたし、先を急いでおりやすゆえ、手短に……！」

（女とその下男、面番所へ行き、手形を差し出す）

番士 「その方たち、関所手形を改める……名を名乗れ。」

志づ 「はい、江戸、日本橋、あかね長屋、与兵衛の娘『しづ』でございます。」

佐久三 「その下男の佐久三でござえやす。」

番士 「旅の目的は何じゃ？」

志づ 「はい、お伊勢参りでございます。」

番士 「じゃが……その方、女の一人旅とはぶつそうじゃな。それに下男はこの佐久三一人。さてはその方たち、ただならぬ間柄ではないのか？」

佐久三 「いーえ、滅相もございやせん。あつしとお志づ殿はただの幼馴染でござえやす。」

番士 「ふーん、まあよいわ。では、人見女のお福！」

（面番所より登場）

人見女 「改めを行なう。」

志づ 「嫌でございます。」

佐久三 「いや、お志づ殿、そいつはまずいのはござえやせんでしょうか？」

志づ 「嫌といったら嫌よ！男は良くて女だけ改めるなんて、どうにも合点がいかないわよ！」

番士 「その方、わしら、役人にたてつくと申すのか？」

佐久三 「い、いえ、お待ち下せえ、お役人様！お志づ殿、後ほど、茶屋でお団子を三つこ馳走するでございやす！」

志づ 「三つ？それって、三つついてる串団子が三本ってこと？」

佐久三 「あ、ああ、そうです、串団子が三本でげす。」

志づ 「そんなに食べられないわ！二本で良い！あと、お茶もね！」

佐久三 「……ああ、では二本とお茶で。それゆえ、少しの間、我慢するでございやすよ！」

（人見女が傍へ寄り、女に肘で合図をする）

志づ 「は？何でございますか？」

人見女 「付け届けじゃ！」

佐久三 「付け届け？お心付けのこととせえやすかい？」

人見女 「難儀なく済ませたいであろう？」

佐久三 「袖の下というやつでござえやすね。（と立ち上がる）」

志づ 「（下男に向かって）お団子買えなくなるからいい！」

人見女 「ちっ！……口を開けい！かね無し、痘痕（あばた）、腫れ物、黒子（ほくろ）、特段、目に付くはなし。」

次、御髪（おぐし）をあらためる。髪切にては、なし……小さき禿（は）げ、一つ有り。」

志づ 「ええっ？何かの間違いでは？」

人見女 「間違いとは何だ？」

志づ 「だって、私は禿げておりません！」

人見女 「ならば、手形と合わぬな、髪が伸びるまで待つか、一度江戸に戻り、手形を書き改めてもらうかな！」

志づ 「禿げておりません！」

佐久三 「あー、禿げのように見えますのは、旅の枕が擦れて、そのように見えるのかも知れません。どうか、今一度お改めを！（と人見女にお心付けを渡す）」

人見女 「（再度御髪をみて）よく見れば、これは禿げではないな。擦れておるだけだ。（番士に）『小さき禿げ有り』は取り消して下され。他に特記なし。以上ですな。」

番士 「よろしい……改めて……志づ、旅の目的は伊勢参宮であるな？続けて畿内を回るのであるな。」

志づ 「はい、さようでございます。」

番士 「そなたの手形に偽りはないと見た。その方たち、通つてよし。」

志づ 「ありがとうございます！」

佐久三 「お、お役人様、あつしは……？」

番士 「んっ？おお、その方も通つてよいぞ！」

佐久三 「ええっ？お役人様、あつしの手形は……？」

番士 「おお、おぬしも手形を持つておるのか！じゃが、よほどの不審者でもなければ、男は手形は必要ないぞ！高札の三つ目にも『関より外に出る女はつぶさに証文に引合（ひきあわせ）通すべき事』と書いてあつたであろう？」

佐久三 「ええ、てえことは、男は手形は必要ねえ、と。」

番士 「何度も同じことを聞くでない！」

佐久三 「あ、そうでございやしたか！いやあ、幼い頃より興じておりやした道中双六には、箱根のマスに止まると『手形を忘れ、江戸へ戻される』とありやしたゆえ、男も手形が必要」と思い込んでいたでござえやすよ！」  
（道中双六を取り出し説明する）

番士 「……ということは、おぬしも手形を持つておるのだな！」

佐久三 「へえ、もちのろんでござえますよ！」

志づ 「でも偽物でしょ？」

佐久三 「しーっ！お志づ殿！それは内緒でござえやすよ！」

番士 「ん？何か申したか？」

佐久三 「い、いえ、な、何でもございやせんよ！あつ、それはそうと、何でこの関所では、江戸から出る女、いわゆる“出女”には厳しいのですかい？あ、もしや、お役人様の趣味でござえやすかい？」

番士 「馬鹿を申すな！さよう、出女と申すのはだな、全国の大名から、各々の奥方と娘を奉公人として江戸に住まわせておるのじゃ。」

佐久三 「奉公人というのはいわゆる人質のことですか？そいつは、いつてえどうして？」

番士 「大名の奥方と娘を奉公人、つまり人質として江戸に住まわせることによって、徳川の天下を良しとしておらん大名らが謀叛（むほん）を企てんようにする為じゃ。して、その奉公人の奥方と娘共が江戸から逃げ出して来ぬようにこの箱根の関所で厳しく監視しておるのじゃ。どうじゃ、わかったか？後ろにおる者たちもご理解頂けたか？」

佐久三 「さようでござえやすか。だから、女にだけ厳しいのでござえやすな！」

番士 「そういうことじゃ！」

佐久三「では、あつしらはこれで・・・！（と行こうとする）」

番士「んん、じゃが、折角手形を持って来おったのであれば、見させてもらおう。手形を差し出せ！」

志づ「お役人様、いけません！なにしろ偽物ですから！」

佐久三「だ・か・ら、しーるーっ！」

番士「んっ？（袖の中の人相書を確認して）おぬし、今一度名を名乗ってみよ！」

佐久三「あ、あつしですかい？江戸、日本橋、あかね長屋の佐久三でござえやすわよ！」

番士「ん、ござえやす、わよ？」

佐久三「あわわ、き、緊張のあまり、べろがおかしくなったでござえやすわよ！また、レロレロレロ！」

番士「ござえやすわよ？ふふん、佐久三・・・これで決まりじゃな！その方、女であるな！関所を通るために女が男の身なりをしておるな！」

佐久三「いえいえ、何をおっしゃっておるのやら、おたわむれが過ぎましようぞ・・・。滅相もございやせん！あつしはうそ偽りなく男でございやす！」

志づ「うそっ！佐久三、女だったの？！」

佐久三「お志づ殿、何を仰っておるのですか？！幼馴染でしょうが！」

番士「実はかような人相書が届いておるのじゃ（と人相書を見せる）。江戸に奉公に出ておった『さく』という女が一昨日、江戸を逃げ出したと記しておる。加えて、右目に黒子（ほくろ）あり、右手にて左耳を触る癖あり、と記してある。昨日より、この『咲』を搜索すべく作戦を模索しておったが、むやみやたらと詮索（せんさく）し過ぎたせいか、情報が錯綜し、サクサクとお縄を頂戴する思索（しさく）で、防護柵まで作成したが、いまだ柵にも網にもかからん。このままでは、末代までの恥！そこに上手い具合にこの佐久三が現れおった。この男を『咲』にでっち上げればわしの株もあがるというもの！ふっふっふ！」

人見女「番士様、心の声もれ出てしまっておりませぬぞ！」

佐久三「何をでっちあげるんですか？」

番士「おっといかん！おぬしには関係の無いことじゃ！それでじゃ、おぬし、この『さく』に相違ないな！『さく』が男の変装をして、佐久三を名乗り、この箱根の関所を通るつもりでおったな！」

人見女「（前に出てきて、男の顔をじろじろと見る）確かに右目にほくろあり。人相書に相違ありません。」

佐久三「さく？確かにあつしの名前『佐久三』と似ておりやすが、まったくの人違いでございやすよ！黒子（ほくろ）も、かような癖もあつしの物心つく以前からあることでして、偶然そのさくって女と同じなだけでござえやすよ！」

番士「男として、上手く立ち回れておるつもりであろうが、そうは問屋がおろさん。話し口調も立ち振る舞いもよくよく見れば、女々しく、わしははなから怪しいと思うておったのじゃ！観念せい！」

佐久三「お役人様、長げえ間この関所に詰められて、性格が偏屈になられたのではござえやせんかい？」

番士「たわけ！お福、この者の股間を改めよ！」

佐久三「ええっ？股間でござえやすかい？」

（人見女、男に露骨に手を差し出す）

人見女「付け届け！」

佐久三「付け届け？お志づ殿の改めの際にお渡ししたでござえやすよ！」

人見女「志づは志づ、おぬしはおぬし。」

佐久三「あ、あつしはやましきことは何もなく、全くの潔白でござえやす！何ゆえ、袖の下なんぞお渡しする必要がありませんか？」

人見女「ちっ！懐を改める。着物を上げなさい！・・・早うせい！（じろじろと眺め）拡大鏡でよくよく見ても、何かついているようでしたが、どうやら男ではないようです。」

（女、両手で顔を覆いながらも指の隙間から覗いている）

佐久三「ええっ？確かに・・・それほど立派ではねえですが嘘偽りなく男でござえやすよ！・・・（周りを見渡し）あつ、この旅のお方と昨晚旅籠にて酒を酌み交わしたのでござえやすが・・・あつしは確かに男でげすな？」

番士 「ええい、わしの目に狂いはないわ！おぬしは、江戸より姿をくりました『さく』に相違ない！それに、この手形は似非手形ときた！このままこの関所を通す訳には参らん！この二人を獄屋へ連れて行け！であえゝであえゝ！」

志づ 「ええええっ！！わたしもですか？」

番士 「志づ、この者の幼馴染であろう？おぬしも共犯じゃ！四の五の言わずに二人でしばし獄屋に入っておれ！後ほどじっくり取調べを行う！覚悟しておれ！」